

## 実践看護学演習における地域領域の演習効果と今後の課題

園田 和子<sup>1)</sup>, 岩崎 文枝<sup>2)</sup>

### 要 約

本研究の目的は、地域看護領域が実践した健康教育演習を通して、看護学生が自己の課題を明確にできたか、また演習のあるべき内容について明らかにすることである。対象は実践看護学演習を受講した学生で、保健所・保健センター実習終了後に調査を実施した。その結果 26 名の学生から回答を得て、演習前・後および実習開始 1 週間後と実習終了後、演習終了後・実習終了後の自己評価得点の平均値を対応のある t 検定を用いて分析した。

分析の結果、演習後と実習終了後において、学生は自己の課題を明確にできていたことが示唆された。また、自己評価項目の「対象の特徴および発達段階の特徴の理解」、「対象の健康状態のアセスメント」、「看護問題（看護の必要性）の明確化」、「看護計画の立案」に関して、演習は効果的であった。しかし、「対象に対して、看護ケアについて説明や会話ができたか」の項目に関しては、さらなる演習の工夫が必要であることが示唆された。

**キーワード：**実践演習，健康教育，デモンストレーション，自己効力感

### I. 緒 言

本大学では、3 年次後期に実施する領域別実習前の学内演習として、実習前演習を毎年実習直前に行っていたが、平成 23 年度から実践看護学演習として 3 年次前期に科目化した。科目立てしたことにより、成人看護領域から、発展的学習として地域看護領域もその演習を実施することにした。科目の目的は、模擬患者に対してこれまで学んだ全ての領域の知識や技術を統合して、クリティカルシンキング（論理的思考）と看護過程を実践的に展開することで、3 年次後期の領域別実習前に個別性を踏まえた看護実践能力や対人関係のスキルを養うことである。そこで、まず成人看護領域において検証を行った。成人看護領域における研究の目的は、健康障害の治療・看護を要する時期の事例演習を通して、技術演習のあるべき内容ならびに体制について明確にすることと、看護学生としての基本的態度・社会人基礎力・看護実践能力の視点から自己の課題を明確にすることであった。その結果、実践看護学演習は学生が問題解決思考過程を形成することに有用であり、看護者としての基本的態度・社会人基礎力・看護実践能力の視点から、自己の課題が明確化されていることが示唆された<sup>1)</sup>。

健康障害の治療・看護を要する時期から退院後の

地域での生活までを支援すると、健康段階の経過を踏まえた支援方法が理解できるのではないかというコンセプトのもと、地域看護領域においては模擬集団を設定して健康教育を実施した<sup>1)</sup>。本稿は、実習前に実施した科目である成人看護学領域の演習に次ぐ研究として、成人看護領域の調査と併せて実施した地域看護領域の調査結果の分析およびまとめである。

研究目的は、地域看護領域が実践した健康教育演習（以下、演習）を通して、実習前に地域看護学実習を想定した演習のあるべき内容について明らかにすることと、看護学生が実践した健康教育における自己の課題を明らかにすることである。

### II. 研究方法

#### 1. 対象

本学の実践看護学演習を受講し、研究に同意した 3 年次生である。

#### 2. 方法

学生に成人看護学領域に次ぐ研究として、成人看護領域の調査と並行して、保健所・保健センター実習終了後に研究目的を説明し、調査票を配布した。調査は平成 23 年 6 月～平成 25 年 3 月に実施した。回収方法は、平成 23 年度は学内の回収箱にて回収し、平成 24 年度は研究者への返送にて回収した。なお、回収をもって調査への同意と見なすことを事前に説明し、承諾を得た。

1) 鹿兒島純心女子大学看護栄養学部看護学科

2) 防衛医科大学校医学教育部看護学科

### 3. 調査内容

看護過程を展開する上で必要なコミュニケーション、個別性、優先度、アセスメントなど6項目と対象の特性・発達段階の特徴、健康状態のアセスメント、看護問題の明確化、看護計画立案、到達度の5項目である。評価基準は「大変よくできた」の10点から「全くできなかった」の1点までの各10段階評価とした。得られた10段階評価の得点を1～10点に数量化して各々の項目得点とした。

### 4. 分析方法

1) 演習前・後、2) 実習開始1週間後と実習終了後、3) 演習終了後・実習終了後の比較にあたり、対応のあるt検定を行なった。データの集計・解析にはSPSS ver20 for Windowsを使用し、いずれにおいても有意水準は $p < 0.05$ とした。

### 5. 倫理的配慮

個人情報保護のため調査票は無記名とし、ID番号で管理した。研究協力の依頼に際しては任意であり、研究に協力しなくても何ら不利益を受けないこと、個人が特定されないこと、調査結果は研究目的以外に使用しないこと、調査票の回収をもって同意と見なすことを事前に文書・口頭で説明して承諾を得た。なお、所属の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

### 6. 演習内容および方法

#### 1) 演習内容

(1) 実践看護学演習の講義内容及び方法は、竹生ら<sup>1)</sup>と同様に、科目の構成に沿って実施した。

(2) 実践看護学演習22.5コマのうち、4コマを地域看護領域が実施した。

#### 2) 地域看護領域の演習

##### (1) 演習目的

①模擬集団の全体像を踏まえ、特性に合わせた指導計画を作成し、対象とテーマに応じた指導方法および指導技術を駆使して実践できる。

②健康教育の演習を通して、基本的態度・専門知識・社会人基礎力の視点から自己の課題を明確にできる。

##### (2) 演習内容

①学生が2～3人組となって実践看護学演習で提供された事例に関するテーマを一つ選定し、健康教育の指導案・媒体を作成して、それを模擬集団に実施した。

②模擬集団役の学生は、対象の立場になって反応する。その反応を見て健康教育を実施した学生は、演習全般から、対象の行動変容を促すための指導内容の実際から健康教育の要点を導きだした。

③平成23年度のテーマは、(a)一日に必要な水分の摂り方、(b)からだにやさしい食事摂取(量と質)、(c)上手なお酒の飲み方、(d)家庭の中でできる身体の機能を上げる工夫、(e)上手なストレスとの付き合い方、(f)快適な眠りの勧め、(g)お口の健康・歯の健康、(h)上手な冷暖房の仕方、(i)上手なお風呂の入り方、(j)快便、快尿で快適生活、(k)メリハリのある生活リズム、(l)薬の上手な使用方法、(m)緊急時のあわてない、兼ねてからの備えであった。なお、平成24年度のテーマは(c)・(e)・(f)・(h)～(m)のテーマを、(n)認知症、(o)上手な母子健康手帳の使い方、(p)1歳6か月児の生活指導、(q)3歳児の生活指導に変更した。

### (3) 演習方法

①学生2人1組を25グループ作り、3人の教員でそれぞれ指導した。

②発表・質疑応答まで含めて30分で行った。

## Ⅲ. 結 果

調査票の回収総数は33名(回収率36.7%)であったが、回答に欠損項目の多い調査票を除き、26名を分析対象とした(有効回答率は28.9%)。全体のCronbach's  $\alpha$ 係数は0.96であった。対象は平均年齢 $21 \pm 0$ 歳の女性である。

### 1. 演習前後の自己評価得点の平均値の比較

演習前のCronbach's  $\alpha$ 係数は0.928、演習後は0.917であった。

演習前・後の自己評価得点の平均値は表1のとおりであった。演習前・後の自己評価項目の得点の平均値を、対応のあるt検定によりそれぞれ比較した。その結果、演習後の自己評価項目「対象の特徴および発達段階の特徴が理解できたか」( $p=0.001$ )、「対象の健康状態がアセスメントできたか」( $p=0.001$ )、「看護問題(看護の必要性)が明確化できたか」( $p=0.001$ )、「看護計画が立案できたか」( $p=0.001$ )、「演習前・後の全体的な到達度はどの程度ですか」( $p=0.001$ )に対する自己評価得点の平均値は、演習前の自己評価得点の平均値と比べ、有意に高かった(表1)。

自己評価の理由は、表2のとおりであった。その内容は「対象の特性及び発達段階の特徴を理解できたか」の項目では、理解できた理由として、「イメージ化が図れた、対象理解ができた、実感できた、統合化が図れた」をあげていた。「対象の健康状態がアセスメントできたか」の項目では、「グループダイナミズムの発揮、対象者の理解、イメージ化、視点を捉える力の発揮」をあげていた。学生の自己の課題

表1 実践看護学演習前・後の自己評価の平均値の比較 (n =26)

項 目	演習前の自己 評価平均値 (SD)	演習後の自己 評価平均値 (SD)	t 値	p 値
対象の特徴および発達段階の特徴が理解できたか	4.2 (1.5)	7.3 (1.2)	-9.506	.001
対象の健康状態がアセスメントできたか	3.9 (1.4)	6.8 (1.6)	-9.114	.001
看護問題 (看護の必要性) が明確化できたか	4.5 (1.5)	7.2 (1.5)	-9.233	.001
看護計画が立案できたか	4.3 (1.6)	6.3 (1.4)	-7.824	.001
演習前・後の全体的な到達度はどの程度ですか	4.4 (1.7)	7.0 (1.4)	-8.457	.001

p &lt; 0.05

表2 実践看護学演習前・後と実習1週間後・実習終了後の自己評価の理由

		実践看護学演習前・後	実習1週間後と実習終了後
1 対象の特性及び発達段階の特徴を理解できたか。	イメージ化	・演習前は小児のイメージがあまり湧かなかったが、演習を通してイメージできた。 ・演習することで在宅でのケアの在り方がイメージできた。 ・演習を通して指導をもらい、生活することなどについて具体的にイメージできた。	
	対象の理解	・地域の対象を知ることができた。	・1週間ではなかなか会話できなかったりしたが、少しずつ慣れていくと特性などがわかるようになった。 ・いろいろな人がいたが、割とできたと思う。 ・1週間は対象を理解、実際に会話やコミュニケーションを通しての情報収集が多かった。
	実感できた	・演習することで実感できた。	
	統合化	・演習前のイメージと実際を結びつけることができた。	・3歳児健診などを通して、実際に自分たちが集団指導することで、今まで習ったことがつながった。
	振り返り		・在宅では限られた時間で特徴をつかまないといけなかったもので、思っていたより難しかった。 ・2週目以降は、それらを踏まえた振り返りができた。 ・理解は深まったと思う。
2 対象の健康状態がアセスメントできたか。	グループダイナミズム	・グループで考えられたと思う。 ・グループで意見を出し合うことで理解が広がった。	
	対象者の理解	・演習により対象者の状態がみえてきた。	・病態を踏まえた上で対象全体のアセスメントにつながったため。
	イメージ化	・演習前は殆どイメージできなかったが、演習を通してイメージができた。	・対象の状態を訪問前に知らせてもらっていたので、イメージしやすかった。
	視点を捉える力	・イメージではなく実際の人を通して演習を行うことで、より多くの視点で対象のアセスメントを考えることができた。	
	自分の課題	・まだ気づき、知識が足りないため。	
3 看護問題 (看護の必要性) が明確化できたか？	振り返り		・退院指導等を行えたので。 ・できたと思う。 ・自信がない。
	明確化	・話し合い、実際に演習をみんなですることによってみえてきた。 ・演習前あまり看護の必要性が明確ではなかったが、演習を通して明確にすることができた。	
	気づき	・演習して気づいたものがある。	・対象だけでなく、家族を含めての視点が大切だと学び考えることができた。
	模擬対象者からの反応の効果	・演習前は「ただ何となく」だったものが、演習を通して対象の反応を得て、さらにその反応について考察することができたから。 ・対象者の声を実際に聞くことで明確化になった。	
4 対象に合わせた看護計画の立案ができましたか。	振り返り		・家庭訪問などはその日しか関わらないので、本当にこれでよかったのか疑問が残った。 ・1週間では難しかったが、その後は少しずつできるようになった。
	計画の具体化	・勉強して計画したからずれていないと思う。 ・演習前は必要な計画がわかっていない部分もあったが、演習を通して必要な計画を立てることができた。 ・演習で対象者を設定することでより具体的な計画になった。 ・演習前はただ教科書通り書くだけだった。	・自分なりに指導を踏まえながら行ったため。 ・地域を捉え、計画することは最初は難しかったが、現場で体験するうちに立案できた。 ・個別性を理解し、計画することができた。
	振り返り	・演習により振り返ることができた。 ・知識が足りず、結びつきがないが多かったと感じた。	・良くできなかった気がする。
5 全体的な到達度はどの程度ですか。	個別性	・演習を通しより対象一人ひとりに合わせた看護について考えられた。	・いろいろな人がいて面白かった。
	客観的視点	・演習を通して考え方が不足していたものに気づき、改善することができたから。	・考える視点が広がった。
	振り返り	・グループで一人ひとりの演習を振り返りながらだったので、わかり易かった。 ・自分自身よくわからない。 ・もっと勉強して臨めばよかったと思う。	



として、“気づきや知識が足りなかった”という回答があった。「看護問題が明確化できたか」の項目では、グループダイナミズムの発揮、気づき、模擬集団の反応からできたと回答していた。「対象に応じた看護計画の立案ができたか」の項目では、計画の具体化や演習の振り返りからできたと回答していたが、“知識が足りず、結びつきがないことが多かった”という回答があった。「全体的な到達度はどの程度か」の項目では、“個別性を考えられた、客観的視点を持てた、振り返りでわかった”と回答していた反面、“自分自身よくわからない、もっと勉強して臨めばよかった”という回答があった。

## 2. 実習1週間後と実習終了後の自己評価得点の平均値の比較

保健所・保健センター実習1週間後のCronbach's  $\alpha$  係数は0.934、実習終了後は0.891であった。

実習1週間後と実習終了後の自己評価得点の平均値は、表3のとおりであった。実習1週間後と実習終了後の自己評価得点の平均値を、対応のあるt検定によりそれぞれ比較した。その結果、実習終了後の自己評価項目「対象の特性及び発達段階の特徴が理解できたか」( $p=0.001$ )、「対象の健康状態がアセスメントできたか」( $p=0.001$ )、「対象の看護問題(看護の必要性)が明確化できたか」( $p=0.001$ )、「対象の看護計画が立案できたか」( $p=0.001$ )、「実習1週間後・実習終了後の全体的な到達度はどの程度ですか」( $p=0.001$ )に対する自己評価得点の平均値は、実習1週間後の自己評価得点の平均値と比べ、有意に高かった(表3)。

自己評価の理由は、表2のとおりであった。「対象の特性及び発達段階の特徴を理解できたか」の項目では、理解できた理由として、“少しずつ慣れていくと特性などがわかるようになった、いろんな人がいたが割とできた、3歳児健診の集団指導をしたことで、今まで習ったことが繋がった、在宅では限られた時間で特徴をつかまないとはいけなかったの、思っていたより難しかった”と回答していた。「対象の健康状態がアセスメントできたか」の項目では、“病態を踏まえたアセスメントができた、退院指導を行えたと回答していた反面、自信がない”という回答があった。「看護問題が明確化できたか」の項目では、“対象だけでなく家族を含めての視点が大切だと気付いた、1週間では難しかったが、その後は少しずつできるようになった”と回答していたが、中には“その日しか関わらないので、本当にこれでよかったのか疑問が残った”という回答があった。「対象に応じた看護計画の立案ができたか」の項目では、個別性を理解し計画することができたと回答していた反面、良

くできなかった気がするという回答があった。「全体的な到達度はどの程度か」の項目では、“いろんな人がいて面白かった、考える視点が広がった”と回答していた。

## 3. 実践看護学演習後・実習終了後の自己評価得点の平均値の比較

演習後のCronbach's  $\alpha$  係数は0.895、実習後は0.911であった。

演習後と実習終了後の自己評価得点の平均値は、表5のとおりであった。演習後と実習終了後の自己評価得点の平均値を、対応のあるt検定によりそれぞれ比較した。その結果、演習後の自己評価項目「説明・会話」に対する自己評価得点の平均値は、演習後の自己評価得点の平均値と比べ、有意に高かった( $p=.017$ , 表5)。

自己評価の理由は、表4のとおりであった。「対象に対して、看護ケアの説明や会話ができたか」の項目に対しては、“演習終了後でも生活の視点で説明できなかった、ケアの説明がうまくできなかった”と回答していた。しかし、実習終了後には“会話を通して多くのことを知ることができた、根拠を踏まえて分かりやすい言葉で説明を行い、対象の行動の変化がみられた”と回答していた。一方、“コミュニケーションがうまくできなかった”という回答があった。「対象の個別性を踏まえた看護ケアが展開できたか」の項目では、“保健師の手助けでなんとかできた、限られた時間であったが、本人らしさを生活の中に見つけようと視野は広げられたと思う”と回答していた。「優先順位を考えた看護ケアが展開できたか」の項目では、“少しはできた、今、対象者にとって必要な物事は何か考えてケアを行った、複数の看護問題を抱える対象に対して、何の問題を最も重要視してケアの立案を行うか考えることができた”と回答していた。「会話や看護実践の場面からの情報をアセスメントし、それを加味した看護過程が展開できたか」の項目では、“周りからのアドバイスを貰えばできた、ケアの立案・評価の中で対象の反応を取り入れて展開していった”と回答していた。「課題が見つかったか」の項目では、“もう少し積極的に対象者に話しかけるべきだった、自分に足りないものに気づけた、実習後の振り返りで気づくことも多かった”などがあげられていた。

## 4. 実践看護学演習は、地域看護実習に役だったか

自己評価の平均値は7.54(標準偏差 $\pm 2.20$ )であった。その理由として、“演習でイメージを付けることでスムーズに実習につなげることができた”とある反面、“応用できなかった、実際行くまでイメージがつかなかった”と回答していた。

表3 実習1週間後と実習終了後の学生評価の平均値の比較 (n =26)

項 目	実習1週間後の自己評価平均値 (SD)	実習終了後の自己評価平均値 (SD)	t 値	p 値
対象の特徴および発達段階の特徴が理解できたか	4.8 (1.5)	7.3 (1.2)	-10.690	.001
対象の健康状態がアセスメントできたか	4.7 (1.7)	7.1 (1.4)	-7.701	.001
看護問題 (看護の必要性) が明確化できたか	4.9 (1.6)	7.2 (1.6)	-8.833	.001
看護計画が立案できたか	4.9 (1.9)	6.9 (1.8)	-8.120	.001
演習前・後の全体的な到達度はどの程度ですか	5.3 (1.8)	7.4 (1.5)	-8.905	.001

p &lt; 0.05

表4 演習後・実習終了後の自己評価の平均値の比較

			内 容
1 対象に対して、 看護ケアに ついて説明や 会話ができた か？	演習後	できたこと	・イメージがついた。 ・少しできたと思う。 ・会話はできたと思うが。
		できなかった理由	・生活を含めた視点で説明ができなかった。 ・ケアの説明がうまくできていなかったと感じるため。 ・もともと人と話さない性格のため、うまく会話できなかった。 ・ケアの説明の際は、自分の理解の不足と相手に分かりやすい用語での説明が不十分だったと思う (専門用語を避ける)。
	実習終了後	できたこと	・会話を通して多くのことを知ることができた。 ・説明はわかりにくそうにしていたら、言うことを変えて説明したりするなど工夫すると理解してもらえた。 ・今までの中ではできたと感じる。 ・根拠を踏まえて分かりやすい言葉で説明を行い、患者の行動の変化がみられたため。
		できなかった理由	・コミュニケーションがうまくできなかった。 ・自らはあまりできなかった。保健師の方が行っているのを聴いて学ぶことができた。
2 対象の個性を 踏まえた看護 ケアができ ましたか？	演習後	できたこと	・少しはできたと思う。 ・生活を考えたケアの工夫をグループで話し合うことで考えて実践できた。 ・対象の入院前の生活に近い感じにしたり、会話を通してその人らしさを考えたケアを行った。 ・相手の話や状況からケアを変えることができた。 ・対象の社会的背景を踏まえてケアの立案を行ったため。
	実習終了後	できたこと	・保健師の手助けにより何とかできた。 ・限られた時間であったが、本人らしさを生活の中で見つけようと視野は広げられた。 ・その人らしさを大切にしたいケアができたと思う。 ・ケア立案の際、患者の個性を取り入れるよう心掛けたため。
		できなかった理由	・家庭訪問は話すことしかできなかったから。 ・否定されてから自信がない。
	3 優先順位を 考えたか？	演習後	できたこと ・少しはできた。 ・グループメンバーと話し合って考えることができた。 ・今、対象者にとって必要な物事は何か考えてケアを行った。 ・複数の看護問題を抱える対象に対して、何の問題を最も重要視してケアの立案を行うか考えることができたため。
		できなかった理由	・優先すべきものが分からなかった。
	実習終了後	できたこと	・保健師の方からアドバイスを頂きながら、考えることができた。 ・今何が一番必要なことなのか考えて優先順位をつけることができた。 ・複数の看護問題の中で優先すべきはどれかを考えケアを立案したため。
		できなかった理由	・1日の関わりだったから、あれでよかったのか自信が持てない。 ・あまり展開していない。 ・優先すべきものが分かっていたがなかったと思う。
4 情報をアセ スメントし、 それを加味 した看護過 程が展開で きましたか？	演習後	できたこと	・事前にイメージできたので、少しはできたと思う。 ・個性やその人らしさを大切にしたい看護を行った。 ・周りからのアドバイスをもらえばできた。 ・ケアの立案・評価の中で対象の反応を取り入れて展開していったため。
		できなかった理由	・生活を考え、対象が在宅で過ごすことを考えるのが難しかった。
	実習終了	できたこと	・あとからの意味付けも多かったが、展開していくことを実際にできた。 ・個性も考えた看護ができたと思う。 ・少しできたと思う。 ・受け持ち日数を経るごとにケアの内容が会話の情報から厚みを増していった。
		できなかった理由	・1回きりの関わりだったので、つなげるのが難しかった。
5 演習後に課 題が見つ かったか？	演習後		・地域看護の看護過程のやり方から知る。 ・バイタルの測り方の工夫。 ・対象の生活を捉えること。 ・本人や家族の思いを聞くこと。 ・対象だけでなく家族など周りの方への関わり。 ・考えること。 ・人として話しかけること。 ・対象者の前では自信を持つこと (不安にさせない)。 ・基本となるプランの中にその人らしさをどのように取り入れていくか。
	実習終了		・もう少し積極的に対象者に話しかけるべきだった。 ・コミュニケーションのあり方、さまざまな経験や自分だったらと置き換えて考えることが大切。 ・限られた時間で以下に必要な情報を引き出せるか。 ・観察力 ・実習を通して自分のできる事、できない事など明確化することができた。 ・よく分からないが、自分に足りないものに気づけたと思う。 ・実習後の振り返りで気づくことも多かった。

表5 演習後と実習終了後の比較 (n =26)

項 目	演習後の自己 評価平均値 (SD)	実習後の自己 評価平均値 (SD)	t 値	p 値
看護ケアの説明や会話ができたか	5.6 (2.1)	6.6 (1.6)	-2.570	.017
個別性踏まえた看護ケアができたか	6.4 (1.9)	6.4 (2.0)	-.284	.779
優先順位を考えた看護ケアが展開できたか	6.4 (1.8)	6.4 (2.2)	-.398	.694
会話や看護実践の場面からの情報をアセスメントし、それを加味した看護過程が展開できたか	6.5 (1.8)	6.5 (1.8)	-.182	.857
課題が見つかりましたか	7.8 (1.6)	8.0 (1.7)	-1.000	.327

p &lt; 0.05

表6 実践看護学演習は、地域実習に役立ったと思いますか

- ・頭の中でイメージすることができたので、実際にやるときもどうすればいいか分かった。
- ・家族の思いも聞く大切さを学んだことで、実習でも対象はもちろん家族についての看護を深めることができたと思う。
- ・演習につなげることでスムーズに実習につなげることができた。
- ・個別性のある看護ケアについて考えることができ良かったと思う。
- ・実際に行くまでイメージがつかなかった。
- ・応用できなかった。
- ・分からない。

#### Ⅳ. 考 察

実践看護学演習の中で地域看護領域が実施した健康教育演習を通して、演習前・後の全体的な到達度はどの程度かをもとに演習のあるべき内容について明らかにすること、また学生が自己の課題を明確にするために、保健センター実習終了後の学生に調査を実施した。その結果を 1) 演習前・後、2) 実習1週間後と実習終了後、3) 実践看護学演習後・実習終了後の自己評価項目の得点の平均値で比較検討し、その内容を考察した。

##### 1. 自己評価得点の平均値の比較

演習前・後の自己評価得点の平均値の比較においては、全ての自己評価項目に関して、演習後の自己評価得点の平均値の方が有意に高値であり、学生の自己評価の理由の記述は自己評価平均点を反映しているものであった。このことから成人看護領域の演習効果<sup>1)</sup>と同様に、地域看護領域の演習においても「対象の特徴および発達段階の特徴の理解」、「対象の健康状態のアセスメント」、「看護問題（看護の必要性）の明確化」、「看護計画の立案」に関して、演習は効果的であったことが示唆された。

このように学生の演習に対する満足度が高かった要因に、デモストレーションにおける模擬集団の役割が大きく作用していると考えられる。模擬患者の導入は臨床現場に近い状況を再現でき、学生のコミュニケーションに関する興味や関心を引き出すことに有効である<sup>2)</sup>ことはよく知られている。今回の演習において学生は、先行学習として成人看護領域の看護過程の展開演習を通して、詳細に対象とその家族をアセスメントしていた。そのため、模擬集団役の学生は発表者の言動に合わせてしぐさや、態度などの

非言語的コミュニケーションをリアルに演じることができ、また、その反応を見た発表者も一層臨場感を持って、健康教育を実施したと考える。

次に、実習1週間後と実習終了後の自己評価得点の平均値の比較においても、演習前・後の比較と同じ4項目について検討した結果、4項目全てにおいて実習1週間後の自己評価得点の平均値より、実習終了後の自己評価得点の平均値の方が有意に高かった。学生の自己評価得点の理由は、自己評価平均点を反映しているものと考えられる。これは成人看護領域の実習1週間後と実習終了後の自己評価得点平均値の比較<sup>1)</sup>と同様の結果であることから、地域看護領域の演習においてもこの4項目全てに関して、実習は有用であったといえる。

しかし、これら4項目の自己評価得点の平均値に関しては、演習終了後の得点平均値より実習1週間後の得点平均値の方が低下していた。これは学生にとって、地域を捉えることや健康教育を計画することが最初は難しく、1週間ではなかなか会話できなかったが、少しずつ慣れてくると特性が分かるようになったとの回答より、初めての地域看護実習に戸惑いがみられたためではないかと推察される。この傾向は、第一報の成人看護領域の実習1週間と実習終了後の比較でも認められている結果<sup>1)</sup>と同様である。

演習後と実習終了後の自己評価得点の平均値の比較においては、「対象に対して、看護ケアについて説明や会話ができたか」の項目で、演習後の自己評価得点の平均値より、実習終了後の自己評価の平均値の方が有意に高かった。このことは演習終了後には“生活を含めた視点で説明することができなかった”と



いう学生の回答がみられたが、実習終了後は“説明して分かりにくそうだったので言葉を変えて説明した”や、“会話から多くのことを知った”などの回答がみられることから、これにより平均値が上昇したと思われる。また、他の3つの項目である「対象の個別性を踏まえた看護ケアができたか」、「優先順位を考えた看護ケアが展開できたか」、「情報をアセスメントし、それを加味した看護過程が展開できたか」に関しては、演習後との実習終了後の自己評価得点の平均値に差が認められなかったものの、この「対象に対して、看護ケアについて説明や会話ができたか」の項目は、実習前演習を踏まえて地域看護実習を体験したことにより、学生が必要な支援を捉え、対象に応じた言葉を選び、自信をつけて健康教育に臨んでいったことがわかるものであり、自己効力感<sup>2)</sup>が高まったといえる。そのため、演習で強化すべき項目であることが示唆されたといえる。今後さらに看護実践力を育むために、授業では学生自ら問題思考的な授業を展開することの重要性が指摘されており<sup>4)</sup>、模擬集団のみの実施ではなく可能な限り実際の対象を前にした健康教育のデモンストレーションの実現等の教材化<sup>5)</sup>の工夫が必要であると思われる。

学生の自己の課題の明確化については、演習後と実習終了後の自己評価得点の平均値に有意差は認められなかったが、演習後の自己評価得点の平均値 7.8、実習終了後の自己評価得点の平均値 8.0 とそれぞれ高値であることから、学生はそれぞれの健康教育の実践において自己の課題を明確にできたといえる。

## 2. 地域看護領域における看護実践能力を育成する思考過程の構造

松谷らの看護実践能力の構成要素<sup>4)</sup>に基づき作成された、竹生らの看護実践能力を育成する思考過程の構造<sup>1)</sup>に本稿の結果を当てはめてみた。まず、松谷らの「人々を理解する力」<sup>4)</sup>は竹生らの「基本的態度」に相当し、その要素は論理的思考力、対人関係のスキルから成り立っている。演習後と実習終了後が演習前や実習1週間よりクリティカルシンキング、看護診断過程、看護実践課程、説明、会話力が有意に高いことから、必要能力とされる読解力、観察力、状況把握力、理解力が教員や実習指導者の支援を受けながら段階的に形成されたといえる。また、松谷らの「人々中心のケアを実践する力」<sup>4)</sup>は、竹生らの「社会人基礎力」に相当し、「看護の質を改善する能力」<sup>4)</sup>は、竹生らの「看護実践能力」に相当している。「社会人基礎力」の必要能力は課題発見力、計画力、創造力であり、「看護実践能力」の必要能力は発信力、傾聴力、実行力であった。いずれの必要能力においても演習や実習を通して高めていたといえるため、

同一模擬事例を用いた実践看護学演習は、地域看護領域においても学生の看護に対する基本的態度・社会人基礎力・看護実践能力<sup>4,6)</sup>を高めるために効果的であったといえる。地域看護領域の演習は、保健センター実習で実施する健康教育の発表を想定したものであった。そのため、この研究で得られた結果を実習前に行う今後の健康教育の演習に活かし、実習で看護の統合化を図ることができれば、卒業時の技術到達度の向上に貢献できると考える。

今後の課題としては、学生の自己評価が低い理由として自己効力感が低い内容の記述が認められるため、地域看護領域の演習において、学生が自己効力感を実感できる演習の充実を図っていく必要があると考える。

研究の限界として、一大学が試行した結果であり、研究対象者が少なかったことから、今後さらにデータを蓄積していく必要がある。

## V. 結 論

本研究では、地域看護領域が実践した健康教育演習を通して、演習のあるべき内容について明らかにすることと、学生が自己の課題を明確にすることを目的とし、保健所・保健センター実習終了後に調査を実施した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 実習前の演習後と実習終了後の自己評価得点の比較より、学生は自己の課題を明確にできていた。
2. 実習前の地域看護領域における演習は「対象の特徴および発達段階の特徴の理解」、「対象の健康状態のアセスメント」、「看護問題（看護の必要性）の明確化」、「看護計画の立案」に関して効果的であった。
3. 地域看護領域における健康教育演習では「対象に対して、看護ケアについて説明や会話ができたか」の項目が実習によって自己効力感が高められていた。今後さらに、学内演習においても模擬集団のみではなく、可能な限り実際の対象で健康教育ができる環境整備が必要である。

## 謝 辞

本研究のために快くご協力くださいました学生の方々に心よりお礼申し上げます。なお、本研究は第3回日本公衆衛生看護学学会で発表したものに、加筆・修正を加えたものであることを記します。

## 文 献

- 1) 竹生真規, 他: 実践看護学演習による学生の思考過程形成の有用性 (第1報). 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 17: 25-32, 2013

- 2) 吉田登志子, 板谷千穂, 下野勉: ロールプレイと模擬患者を活用した歯学教育におけるコミュニケーション実習の導入. 医学教育 30 (6): 433-440 1999
- 3) 宗像恒次: 行動科学からみた健康と病気. メヂカルフレンド社, 東京, 2011.15-16
- 4) 松谷美和子, 他: 看護実践能力: 概念, 構造, 及び評価. 聖路加看護学会誌 14(2):18-28, 2010
- 5) 安酸史子: 看護学実習における教材化に関する問題と求められる研究成果. Quality Nursing 3 (3): 15-20, 1997
- 6) 戸田肇: 看護系大学における学生の看護実践能力育成のための先駆的な取り組み, 大学と臨床(病院)との共同による実習指導の検討, 看護教育Ⅲ 看護実践能力の育成. 日本看護協会出版会, 東京, 2008.12-21,



## Positive effects of 'nursing work-placements' and areas for improvement

Kazuko Sonoda<sup>1)</sup>, Fumie Iwasaki<sup>2)</sup>

1) Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition, Kagoshima Immaculate Heart University

2) National Defense Medical College

Key words : work-placement practicum , Community Health Care, Demonstration, self-effect

### Abstract

The purpose of this research was to investigate how nursing tasks could be clearly shown to student-nurses via Community Health Care work-placements. Furthermore, areas which could be enhanced or improved were also investigated. All the subjects were current student-nurses. The location for the research was a public health center.

In total, 26 answer sheets were collected for analysis.

Judgements were made based on students responses to questions which compared three different time periods, namely:

- 1) Before nurse-training started AND after nurse-training started.
- 2) Seven days after a nursing-placement commenced AND after the placement ended.
- 3) At the end of a nursing-placement AND during nurse-training practice.

Unsurprisingly, the results showed that students clearly understood required tasks after nurse-training and work-placements were completed.

More specifically, students stated that work-placements were effective for the following:

"correct understanding of patients", "clear understanding of further development requirements", "medical assessment of patients", "clearer understanding of why nursing itself is needed", "making accurate nursing plans".

However, "how to talk earnestly with patients" and "how to give lucid explanations to patients" emerged as areas of concern. Students stated that work-placements would be much improved if these two difficult areas could be addressed more thoroughly, including alternative ways of dealing with these problems.

---